高知県立
文学館
高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol. 69

リレー随筆

「愛すべき花の妖精たち」展によせて

— 井村 君江

薔薇でも百合でも、パッと花開くと美しく、目に見えないものがそうさせるのではないかと思えてくる。「花の命は短くて…」と花の蕾が開いて散っていく様を、人の一生に譬えた人もいる。花を生かす「目に見えないもの」を、妖精と呼びたい。自然の精霊である。土に張った根から水分を吸収し、茎を伝い葉や花を育てる。地・水・火・風の四大元素には、西洋では古代から名前があり、ノーム、ウンディーネ、サラマンダー、シルフで、さまざまな物語が昔話(フェアリーテイル)になって現代まで伝わっている。日本でこうした傾向を「水」で思えば、神話の「セオリツヒメ」や「ハヤアキツヒメ」「ハヤサスラヒメ」の話が思い浮かぶ。花を見て妖精を思う必然が分かろう。

花々から妖精を連想して絵画を描き詩に歌ったのが、シシリー・メアリー・バーカー(1895-1973 Cicely Mary Barker)である。『花の妖精たち』(Flower Fairies 1923-1985)の8冊の本には、春・夏・秋・冬の四季折々の花、庭園や道ばたに咲く花、樹木の枝に咲く花と160種の花々が歌われ、その真髄、特色が妖精として描かれている。シシリーはロンドンに近いクロイドンに生まれ、生涯独身で絵画や童話を作り続けた。ヴィクトリア朝時代に花を描いた画家を調べてみた。ウォルター・クレイン(1845-1915)、J・J・グランヴィル(1803-1847)、エルンスト・クライドルフ(1863-1956)、チャールズ・ウィルヘルム(1858-1925)など英・独・仏の画家がいるが、花を擬人化したり、諷刺的に使ったり、舞台に載せたり装飾的に使ったり様々で、花独自の性質を描いた画家は少ない。シシリーは花の特色を妖精とし、モデルに姉の学校に来るあどけない純粋な子供を使った。日本に入ってきた妖精は純粋で美しいものと考えられ、その映像は今でも氷上の妖精とか新体操の妖精といった美しさの例えとして用いられている。

妖精は美しく不思議な力を秘めた少女を連想させる反面、一方では恐ろしい男性を思わせる要素も備えている。レプラコーン、ゴブリン、ドワーフ、ピスキーと言うと、髭を生やした老人や、とんがり帽子の怪しい男の子の姿が思い浮ぶ。人間との関係を考えれば、妖精には良いことをする性質の者も、悪いことをする者もいるわけだ。従って一口に妖精と言っても千差万別で、花々の精霊から恐ろしい生き物までおり、精神的な存在でもあり、目に見えない想像上の産物ともとれる。これらの淵源を辿り派生する現象的な問題を「妖精学」として考えたいので、英文学専攻の方面から『妖精学大全』(東京書籍2008年刊)に一応まとめたが、民俗学、心理学、哲学上の問題も更に考えていきたい。妖精の課題は、西洋・日本に亘る広くて深い学問分野なのである。こうした点を思いながら、展示品を見ていただきたい。

(明星大学名誉教授・金山町妖精美術館館長・
うつのみや妖精ミュージアム名誉館長／井村君江)

展覧会紹介 Exhibition

FLOWER FAIRIES™ フラワーフェアリーズ™ ～世界で愛される妖精たち～

平成27年
4月29日(水・祝)
▼
6月28日(日)
企画展示室
観覧料500円

子どもの頃に感じた、不思議な気配…。見えないけれど、花壇や小川のせせらぎのふとした光の中に、何か神秘的なものを感じたことはありませんか？

それはもしかしたら「妖精」との貴重な遭遇だったのかも知れません。

高知県立文学館では、そんな妖精たちの不思議な魅力をご紹介する展覧会を開催いたします。

▲井村君江さん

樹齢何百年という大木を「神宿る木」として祀ったり、風神・雷神の絵を著したり、私たちは自然を敬い、畏れてきました。

日本から遠く離れたスコットランド、イングランド、ウェールズの各地方、そしてアイルランドでも、大昔から森や湖に住む自然の精霊を敬う信仰があり、その名残を「妖精」の中に感じることができます。

人間とは異なる世界に住む妖精の存在は想像力を刺激し、シェイクスピアの時代から世界中の作家や画家に愛され、絵画、詩、文学、挿絵、陶器、戯曲、バレエ、音楽と幅広いジャンルで創作のインスピレーションを与え続けてきました。

今回の展覧会では、英国の挿絵画家で児童文学者のシシリー・メアリー・バーカー(1895-1973)が描いた詩画集「フラワーフェアリーズ」シリーズを中心にして妖精の魅力に迫ります。

展示構成

第一部　妖精を知ろう ～妖精博士の部屋へようこそ～

「ピーターパン」のティンカーベルや、「指輪物語」のエルフなどの〝妖精〟は、思わず姿を思い浮かべられるほど私たちにとってなじみのある存在です。

しかし、どういう場所に暮らして、何を食べているのか、妖精たちの生態を詳しく知っている人はごくわずかです。

そこで、導入として、妖精研究の第一人者で英文学者の井村君江さん(明星大学名誉教授、金山町妖精美術館館長、うつのみや妖精ミュージアム名誉館長)にご協力いただき、妖精の基礎知識コーナーを設けました。

妖精に関する著作・翻訳を多数執筆されてこられた井村さんの素晴らしい業績とあわせてお楽しみください。

第二部　花の妖精たち ～フラワーフェアリーズの世界～

シシリー・メアリー・バーカーがロンドンのブラッキー社より詩画集「フラワーフェアリーズ」を出版したのは1923(大正12)年のことでした。

自然を愛し、自然に学んだ作者が、姉の経営する学校の子どもたちをモデルにしてひたむきに描いたこの作品は、正確に描かれた花々の美しさ、妖精として登場する子どもたちのいきいきとした表情、軽やかなユーモアが散りばめられた詩で圧倒的な支持を得ます。

日本では1976(昭和51)年から5年間、森永製菓のチョコレート「ハイクラウン」の封入カードにイラストが採用され、日本中の子どもを熱狂させたことで一躍知られるようになりました。

展覧会では、シシリーの生誕120年にあわせて「フラワーフェアリーズ」シリーズより、春夏秋冬の妖精たちの複製原画と、原詩をパネルで展示。

可愛い衣装を着て写真撮影が出来るコーナーなども織り込み、「フラワーフェアリーズ」の世界を楽しく立体的にご紹介します。

▶薔薇の妖精

会覧展紹介 Exhibition

FLOWER FAIRIES™

フラワーフェアリーズ™

～世界で愛される妖精たち～

平成27年
4月29日(水・祝)
▼
6月28日(日)
企画展示室
観覧料500円

第三部　まどわしの天才
～コティングリー妖精事件を中心に～

1916(大正5)年7月。英国のブラッドフォード近くのコティングリー村に住む2人の女の子が妖精の写真撮影に成功し、その真偽を巡って大騒動が起きました。

シャーロック・ホームズの作者アーサー・コナン・ドイルまで巻き込んだこの"コティングリー妖精事件"の真相は…。

◀フランシスと妖精たち（エルシー撮影。原板を専門家が分析した結果、二重写し、修正その他の人工的な細工の痕跡はないと確認された。所蔵／うつのみや妖精ミュージアム）

栃木県にある、妖精をテーマにした世界でも珍しい美術館「うつのみや妖精ミュージアム」では、名誉館長の井村君江さんが収集した多数の妖精コレクションとともに"コティングリー妖精事件"で実際に使用されたカメラと妖精写真の原板（ガラス板）が保管されています。

展覧会では、この貴重な資料を借用展示します。妖精事件の詳細とコナン・ドイルが事件に興味をもった背景などもあわせてこの機会にぜひご覧ください。

また、妖精がいかに人々の心をつかんで離さない存在なのか、古今東西の代表的な妖精に関する文学作品から最新の妖精情報までをパネルや書籍展示でご紹介します。

この春は、さまざまな妖精が織りなす文学への旅を、ゆっくりとお楽しみください。

（学芸課／福富陽子）

◆関連企画のご案内◆

■フェアリー・ワークショップ　フラワーフェアリーズ™ になろう！

針金と布で、背中につけて遊べる可愛い妖精の羽根を作って花の妖精たちになってみよう！
（※針金やハサミを使用します。小さなお子様は保護者同伴でお願いします。）

・日　時：5月30日(土)、6月21日(日)
　　各日とも午後2時～4時（予定）
・場　所：高知県立文学館　1階ホール
・定　員：各日とも50名
　　（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）
・参加費：**当日観覧券**と**材料費500円**が必要です。

※画像はイメージです。

■フェアリー・シネマ　映画「パンズ・ラビリンス」上映会

無垢な魂をもった少女を通して、世界に蔓延する哀しみを希望の光に変える
ファンタジー映画。(2006年／スペイン・メキシコ／カラー・字幕／119分)

・日　時：6月14日(日)　午後1時30分～
・場　所：高知県立文学館　1階ホール
・定　員：50名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）
・参加費：**要当日観覧券**

©2006 ESTUDIOS PICASSO, TEQUILA GANG Y ESPERANTO FILMOJ

■フェアリー・リーディング　朗読の会「妖精がくれた時間」

文学館朗読カルチャーサポーターの皆さんによる、妖精が登場する文学作品の朗読会です。

・日　時：5月16日(土)　午後2時～4時
・場　所：高知県立文学館　1階ホール　　・参加費：無料
・定　員：なし（当日、直接会場にお越しください。）

他にも木洩れ日コンサートや最終日限定のイベントなど多彩な関連企画を用意してお待ちしています。関連企画の詳細はチラシをご覧ください。

■展示解説

展覧会担当者による展示解説です。

会期中
毎週土曜日
午後1時半～
(約20分程度)

参加費：要当日観覧券
申　込：不要。
直接会場にお越しください。

FLOWER FAIRIES™ © The Estate of Cicely Mary Barker, 2015　Licensed by ©Copyrights Asia

トピックス

常設展企画コーナーでは、「倉橋由美子・倉橋三郎 姉弟展」を開催します。

2015(平成27)年4月1日(水)～2016(平成28)年3月21日(月・祝)まで、高知県立文学館 常設展示室 企画コーナーでは、「倉橋由美子×倉橋三郎姉弟展～心にいつも土佐の風～」を開催しています。

2005(平成17)年6月10日に倉橋由美子さんが亡くなられて、まもなく10年を迎えます。

倉橋由美子さんは、1935(昭和10)年10月10日、現在の香美市土佐山田町に5人姉弟の長女として誕生。1960(昭和35)年、「パルタイ」が文芸評論家平野謙に認められ25歳という若さで衝撃的なデビューを果たします。この作品は、芥川賞候補にあがり、翌年、第12回女流文学者賞を受賞しました。

以後、著作本・翻訳本は100冊にも及び、『聖少女』『パルタイ』などは英語、仏語、独語、中国語、スペイン語、ポルトガル語など、9カ国語以上に翻訳されています。

▲展示風景

作品は、古今東西の文学からエッセンスを抽出し、独自の世界を創り上げており、今も多くの倉橋文学のファンを魅了しています。

弟の倉橋三郎さんは、歴史・時代小説を中心に、倉橋由美子さんや松本清張さんといった作家の作品3600冊以上の装画を手掛けてきました。その一方で、山野草や桜などを題材にした絵画や版画を制作し、東京を拠点に各地で個展を開かれています。

倉橋さんの作品は、立体的なマチエール(絵肌)で、重厚さや風が流れるような空気感を出しているのが特徴であり、多くの方から支持されています。

展覧会では、4月1日(水)から5月31日(日)まで、平成26年12月に高知新聞社から出版された『心にいつも土佐の風』に掲載された文章や装画や写真などを使って、倉橋三郎さんから見た故郷土佐山田、倉橋家の人々の魅力、姉・倉橋由美子さんの魅力などをご紹介するとともに、倉橋三郎さんの仕事についてご紹介します。

また、6月1日(月)から9月30日(水)まで、倉橋由美子さんの没後10年を偲んで、倉橋由美子さんの文学の魅力をご紹介します。

そして、10月1日(木)から平成28年3月21日(月・祝)まで、再び『心にいつも土佐の風』を中心に倉橋三郎さんの魅力をご紹介します。

会期中、6月7日(日)には、翻訳家の古屋美登里さんと書評家の豊崎由美さんによる対談や村岡希美さんと池谷のぶえさんによる朗読会、10月10日(土)、11日(日)には、倉橋三郎さんのワークショップなど催し物も盛りだくさんです。是非、ご来館いただければと思います。

(学芸課長／津田加須子)

▲「幽玄」／倉橋三郎 画

館長室から

地域づくりで残せるものは

元吉 喜志男

新年度が始まった4月1日、高知県内でも新しい組織、体制がスタートしました。文学館でも文化財団の人事異動で館員2人の入れ替えがありました。例年のことながら、この時期は、新たな気持ちでこの一年をどう漕いで行くかなどと考えたりしています。

同日、地元紙の夕刊の一面には、「高知の再生 学生貢献へ―高知大 地域協働学部が始動―」の見出しが躍りました。同学部は、少子高齢化や産業縮小といった地域課題を解決する人材育成を目指して設立されたものです。

高知県立文学館では、同学部が発足する以前から、高知大学の学生さんを授業の一環として受け入れてきた経緯もあり、文部科学省に学部申請をする時点から発足後の協力依頼を受けていました。内容の詳細については、大学側からの具体的なお話も聴きながらということになりますが、既に、4月末や7月初旬などに大学側の方で授業として文学館にまつわる話や学生とのディスカッションの場なども計画されています。

そんな中、もう20数年前にもなるでしょうか、後に総理大臣も務めた、某県の知事がパリの街の例なども出しながら、「地域づくりをやっていていつも強く感じることは、結局、〝残せるものは文化しかない〟ということで、行政はそこのところをつねに肝に銘じておく必要があるということです。」という言葉が思い起こされてきました。「現代に生きる私たちの務めは、一言で言えば、これまでの文化を守り育て、後世に引き継いでいくことはもとより、歴史の風雪に耐え得る新しい本物の文化をしっかりと創造していくことに尽きるでしょう。」と…。南国の風土の中で育まれた、情熱的な土佐人気質。明治期の「志在天下」の思いなど、文学館が顕彰する先達の精神などと関わる中で、将来を担う若い人達が、自分たちの汗と知恵で〝地域を経営〟していくための、ささやかな何らかのお手伝いができればと考えています。

土佐文学さんぽ 68

仁井田の里 ― 田中貢太郎のふるさと ―

猪野 睦

田中貢太郎ほどわがふるさとを繰りかえし、いとおしんでかいた作家も少ないのではあるまいか。大正、昭和と「なんちゃあじゃなかったきにのう」と、わが人生をつぶやいて没するまでかきついだ。

代用教員をしながら「村長」などをかき上京、やがて「旋風時代」で評判作家になり、菊池寛の「文芸春秋」文壇に抗して「博浪沙」をだし、尾崎士郎、井伏鱒二、榊山潤、田岡典夫らを育てた。この「博浪沙」一行をたびたび高知へ呼んで遊ぶという太っ腹もあった。

生れ故郷を随想に「海村（かいそん）」である、村は三部落に別れ私の家はその中央になった仁井田という所にあった。戸数も七八百、そこには村役場も小学校もあった。東にあった部落を池といって、西になった部落を種崎といって港入江の咽喉元に三百の人家を並べていた。故郷は長岡郡三里村、南に土佐湾の潮があり、その三里にあるわが家という具合にかいた。

◀高知市仁井田にある共同墓地

海岸には庄屋松という共同墓地があって、私の家の墓地もあって、そこに大きな松があって、少年の頃よくその松の中で遊んだこともあったと回想している。

近年はその仁井田も高知空港から浦戸大橋をわたり桂浜へぬけるバイパスが海沿いに走り、物流拠点をめざす高知新港もでき、マンション、ショッピングなど都市化が進んだ。共同墓地もそれぞれが大きな納骨堂に変ってきているが、この昔のままの広い墓地群のなかに田中貢太郎の墓地もあって、ここが唯一かつての仁井田の面影を残していると言えようか。

田中貢太郎はよく土佐へ帰った。昭和15年安芸へ遊んだとき、そこの小松旅館で血を吐いた。田岡典夫、井伏鱒二が見舞にかけつける。このとき安芸から室戸方面へのバスにのった井伏鱒二は、そのちょっとした木賃宿のヒントから名品「へんろう宿」をかきあげた。

安芸から種崎へ帰り田中貢太郎は養生するが翌16年2月没した。葬儀と埋葬には田岡、井伏らがき、東京では80名をこす人で追悼会が開かれ「博浪沙」は「田中貢太郎追悼号」「田中貢太郎第二追悼号」と続けた。「博浪沙」は太平洋戦争2年目、雑誌統合国策命令で45冊だして廃刊となった。廃刊と戦争末期の惨状を見ることなく去ったのは、むしろ幸いであったろうか。

先日、墓地と仁井田東はずれの生家周辺をたどってみた。田中貢太郎先生誕生地の碑の前には大学生が時折くるという話をきいた。

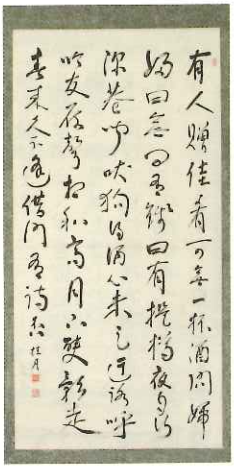
（詩人）

資料受贈報告

―寄贈資料から―

大町桂月書 漢詩軸「有人贈佳肴…」（五言古詩）

鎌田智子氏寄贈



※本文中の漢詩の解釈につきましては、竹本義明氏にご協力いただきました。

大町桂月は高知城下に生まれ、明治後期から大正期にかけて活躍した文人。酒と旅を愛し、高知では地酒の銘としても親しまれていますが、写真の漢詩も酒に因むもの。

有人贈佳肴。可無一杯酒。問婦婦曰無。問有銭曰有。提樽夜自行。深巷聞吠狗。得酒心未足。迂路呼吟友。履聲相和高。月下雙影走。春来久不逢。借門有詩否。

【訓読】人有り佳肴を贈る。一杯の酒無かるべけんや。婦に問へば婦無しと曰ふ。銭有りやと問へば、有りと曰ふ。樽を提げて夜自ら行く。深巷吠狗（はいこう）を聞く。酒を得れども心未だ足らず。迂路吟友を呼ぶ。履聲相和して高し。月下雙影（そうえい）走る。春来久しく逢はず。借問す、詩有りや否やと。

【大意】ある人からよい肴を贈られた。酒がなくてはなるまい。妻に問うとないと言う。銭はあるかと問えばあると言う。夜、樽を提げて自分で買いに出る。町のどこかで犬が吠えている。酒は手に入れたが、まだ満足できず、回り道をして吟友を誘う。下駄の音を高く響かせて、月下を二人の影が走る。春以来久しく会っていない。いい詩はできたかいと問いかける。

寄贈者・鎌田智子氏は、桂月の長男・故芳文氏のご長女。この漢詩軸をはじめ、ご主人の純一氏が生前に蒐集された桂月の書軸・扁額約50点をご寄贈いただき、その中から一幅を常設展示・大町桂月コーナーで展示しています。これもまた、桂月らしいユニークな歌幅ですので、ぜひご覧いただければと思います。

（学芸課／小松路代）

受贈報告（平成26年12月～平成27年3月）敬称略

▼**祥伝社**・「山本一力著「花明かり」初校ゲラ」▼**藤原緋沙子**・「花鳥　藤原緋沙子著　廣済堂出版刊」他　▼**食野雅子**・「マジック・ツリーハウス37　砂漠のナイチンゲール　食野雅子訳　メアリー・ポープ・オズボーン著　KADOKAWA刊」他　▼**小松弘愛**・「現代生活語詩集2014　昨日・今日・明日　全国生活語詩の会編　竹林館刊」他　▼**猪野睦**・「ダッタン海峡　第10号　槙村浩生誕100周年記念特集　平和資料館・草の家編刊」他　▼**竹本義明**・「わびずみの記　吉井勇著　政経書院刊」▼**横田晴光**・「岩伍覚え書　宮尾登美子著　筑摩書房刊」他　▼**伊丹三樹彦**・「伊丹公子全集　伊丹公子著　沖積舎刊」▼**梶田順子**・「歌集　石礫　梶田順子著　ながらみ書房刊」▼**中村梅子**・「句画集　かわせみ　中村梅子著刊」▼**林亮**・「句集　高知　林亮著刊」▼**秋山田鶴子**・「どんぐりの里にて　秋山田鶴子著　風工房刊」▼**蝶俳句会**・「昭和の俳句を読もう―昭和の俳人54人の作品30句と紹介―　蝶俳句会編刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

常設展虫めがね 第四回

シリーズで、変わる常設展示をご紹介！

高知県立文学館では、いつ来ても新しい発見、新しい体験をしていただけるよう、展示入替を行っています。今年度は「自由民権」コーナー・宮崎夢柳（展示中）、「反骨の大衆文学」コーナー・森下雨村（5月末展示予定）、「現代の作家」コーナー・清岡卓行（5月末展示予定）、「近現代の詩歌」コーナー・北見志保子（展示中）を順次展示いたします。

展示作家紹介　北見志保子

北見志保子は、1885(明治18)年、宿毛生まれの歌人。歌曲「平城山（ならやま）」の作詩者として広く知られています。

宿毛小学校高等科卒業後、代用教員(後に訓導となる)として宿毛の各小学校に勤務しますが、1906(明治39)年9月、上京。国語伝習所や中国派遣教員養成所で学びます。1913(大正2)年、幡多郡中筋村有岡(現・四万十市)出身の橋田東声と結婚。東声らが創刊した雑誌「珊瑚礁」や「覇王樹（はおうじゅ）」に毎月のように歌を発表するなど、夫・東声のもと作歌活動に精進していきます。

しかし、1922(大正11)年秋、東声の弟子であった浜忠次郎との恋のために東声と別れ、「覇王樹」とも訣別することになります。東声・志保子・忠次郎は「三人三様の途を行く」こととなり、忠次郎はフランスへと留学し、志保子は奈良や高野山に数か月滞在。東大寺の三月堂や戒壇院など多くの名刹や、三笠山、高円山などを歩き、傷ついた心を癒し、詩藻を育んでいきました。

1925(大正14)年、志保子は帰国した忠次郎と結婚。同年、女性だけの歌誌「草の実」を創刊し、女性として、歌人として充実した時期に入ります。1928(昭和3)年には処女歌集『月光（がっこう）』を上梓。その後も「月光」「定型律」「女人短歌」「花宴」など多くの雑誌を主宰し、女流歌人や後進の育成に努めました。

また、一時期小説家としても活躍。「山川朱実」の名で雑誌「あらくれ」や「火の鳥」「女人芸術」「令女界」などに作品を発表しました。山川朱実の名では『朱実作品集』『国境まで』の2冊を上梓しています。

1955(昭和30)年2月に最後の歌集となる『珊瑚』を発表。「花宴」5月号の誌上には絶詠となった五首を発表し、5月4日その生涯を閉じました。

今回の展示では、今に残る名歌「平城山」の元になった「磐之媛皇后御陵（いわのひめ）」を作歌した時の思いを綴った書簡や、山川朱実名で書かれた随想作品の自筆原稿など貴重な実資料を公開しています。また、志保子の歌に多く触れていただきたいと思い、歌誌「草の実」に掲載された「磐之媛皇后御陵」の八首や、『花のかげ』に収められた「月光菩薩」の歌、絶詠となった「永劫の門」五首などの詠歌をパネルで紹介する他、ふるさとを詠んだ「やまかはよ…」の自筆色紙や短冊2点を展示しています。その他にも志保子の全著作である歌集3冊、山川朱実名の著作2冊の初版本を展示するなど、貴重な資料をとおして、宿毛の生んだ叙情歌人・北見志保子をご紹介しておりますので、その生涯と歌をぜひご鑑賞ください。

（学芸課／岡本美和）

▲展示風景

新資料紹介

石原 純あて寺田寅彦書簡

高知県立文学館では、昨年12月、古書店より石原純あて寺田寅彦書簡(大正6年1月27日付)を購入しました。石原純は寅彦と同じ物理学者で、アララギ派の歌人でもあります。書簡の内容は、反原子論を主張するマッハと、量子仮説を示したプランクという二人の対照的な科学者の意見について、寅彦自身の所見を述べたものです。寅彦が、二人と異なる、より広い視野からの意見を示している点は非常に興味深いものです。

この書簡を、2回に分けて館報でご紹介したいと思います。まだ40歳と若い寅彦が、その後の科学者としての立場を表明したような貴重な内容ですので、ぜひ味わってみてください。

（学芸課／永橋禎子）

＊＊＊

先日は御手紙昨日は又御端書を頂きまして難有う御坐いました。小生病気の新聞記事は記者が誰れかから聞き違への旧聞にて今日では最早全快致しましたからどうか御安神を願ひます

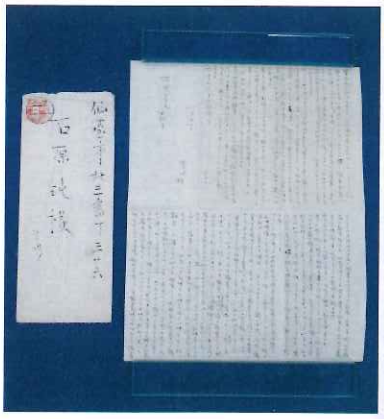
此間はアラヽギを御送り被下まして非常に面白く拝見致しました。

全く御説の様に現代物理学者の信仰としてはプランクの様に考へるのが最も穏当であろうと思いますし　自分でも無意識の中に斯様な信仰をもって居るのではないかと思ひます。しかし又一方で私はマッハ一派の説にも余程同情をもたない訳には参りません。寧ろマッハ等の所論を味へは味ふ程プランク的の考が動かされる様な感じがするのです。

プランクの様な考では現代物理学が既に其能力の限界に近い處迄進んで居て唯僅に其處彼處の穴さへ繕へば最早それで凡てが終る様な楽観的の気分が潜在して居るのではないかと疑います。人間の感覚を無視するようで居て実は人間の感覚だけから得られた世界（しかも今日迄に得られた世界）が知り得られる凡てゞある様に考へて（表面はそうでなく共根柢にはそういふ考があつて）居る傾向がありはしないでしょうか。

一方でマッハは感覚のみが実在の凡てとロでは云つて居ますが　それでも腹の中では感覚から出発して窮め得る限界には制限はおいてない様に思ひます。尤も此れは少し私の僻論でプランクもマッハも帰する處は似たものかも知れませんが兎に角プランクは安心して居り過ぎはしないかといふ疑は起つて時々迷ふのであります。物理学といふものが段々発展しておしまいには生物界の現象に迄切り込んで行く事はないでしょうか。終局には物理学生理学或は心理学迄も段々融合して渾然たる一つの理学といふ大体系に包蔵される様な事は不可能でしようか。小生の希望たけはそうありたいと思ひ又そう信じたいのであります。つまり私の方は大に慾ばつて居るので足るを知らぬといふ謗を免れ難いでしようが、そんな事を考へる時の少生は最早物理学生としての私ではないもつと自由な「私」だと思つて頂きたいのであ（り）ます。物理学者としては或る意味ではプランク流の考を謙譲な物とも云へましようが物理学をはなれた眼で見れば却つてそうでなく思はれます。

（続く）



平成27年4月19日(日)に「北欧文学との出会い展」が無事終了しました。会期中は北欧を感じていただけるイベントをたくさんご用意して、お客さまをお迎えいたしました。

平成27年2月22日(日)には文化人タレントとしてもご活躍の東京農工大学特任准教授、坂根シルックさんをお迎えし、北欧フィンランドの文化や教育についてお話しいただきました。フィンランドの生活や文化、ご自身の体験紹介など、滅多に高知では聞けないお話を伺う貴重な機会となりました。またこの講演会の後半はフィンランドで教職経験のある川崎亜利沙さんとシルックさんの対談形式で語っていただきました。北欧での暮らしを実際に体験なさったからこそ疑問に思うことなどの話題で、会場も和やかな空気になりました。北欧に興味をお持ちの方はもちろん、フィンランド式教育について興味をお持ちの方など、大変熱心な方がお集まりになり、楽しいひとときを過ごしました。

▲講演会の様子

また、3月15日(日)にはフィンランドの伝統楽器、カンテレの演奏会がありました。演奏は日本に初めてカンテレを紹介したカンテレ奏者のはざた雅子先生です。カンテレはフィンランドの国民叙事詩『カレワラ』の中で主人公の老賢人ワイナモイネンがカレワラの地を去る時、フィンランドの地に残していったと記述されています。木製の本体にスチールの弦がはってある撥弦楽器(指ではじいて演奏する楽器)で、澄み切った音と美しい残響が、豊かな余韻を生み出します。はざた先生のカンテレ演奏が始まると、白樺の木立のある湖畔に涼風が吹き抜けるような、そんな景色が脳裏に浮かびました。私自身もそうですが、今回参加されたお客さまは初めてカンテレの音を聞いた、という方がほとんどでした。休憩時間には珍しい楽器に皆さま興味津々で、カンテレの周りに人だかりができていました。

演奏の合間には曲にまつわるエピソードや由来をお話しくださって、カレリア地方の曲では思わず涙ぐむ方もいらっしゃいました。また2階の展示をご覧になって先生が作曲された「極夜(カーモス)」と「オーロラ」という曲を演奏して頂きました。演奏会後には「カンテレを習いたい！」という方もいらっしゃって、皆さますっかりカンテレの音色に魅了されたご様子でした。

展示におきましても、北欧インテリアを取り扱っておられるattract(アトラクト)様にご協力いただき、展示室がお洒落な空間になりましたし、イベント等でも近隣の図書館様にご協力頂くなど、皆さまのご協力のおかげで展示もイベントも成功裏に終わることができました。この場をお借りして、ご協力下さいました皆さまに感謝申し上げます。

(学芸課／谷岡真衣)

▲演奏会の様子

人事異動

【転入】

新所属	旧所属	
文学館総務事業課	坂本龍馬記念館	田中 智子

【転出】

新所属	旧所属	
美術館	文学館総務事業課	岡本 倫枝
坂本龍馬記念館	文学館総務事業課	宮﨑 圭子

【新採】

文学館総務事業課	萩野 佐和子

高知県立文学館ニュース　第69号　平成27年4月30日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX088-871-7857

企画展年間案内

※企画展の観覧料には常設展の観覧料も含まれています。

4月～6月　FLOWER FAIRIES™ ～世界で愛される妖精たち～

4月29日(水・祝)～6月28日(日)　場所：企画展示室　観覧料：500円

展覧会の紹介をしています！
詳細はこの館報の表紙・2ページ・3ページをご覧ください。

© The Estate of Cicely Mary Barker, 2015

7月～9月　ジャッキーだいすき！ －くまのがっこう展－

7月11日(土)～9月6日(日)　場所：企画展示室　観覧料：500円

絵本シリーズ「くまのがっこう」は、やさしいおにいちゃんくまの子と、いたずらできかんぼうな女の子ジャッキーがくりひろげるお話です。この展覧会のテーマは「LIFE」、あたりまえの暮らしを楽しむこと。ジャッキーと心あたたまる一日をお過ごしください。

©BANDAI

9月～11月　ありがとう。宮尾登美子さん ～88年の生涯を偲んで～

9月19日(土)～11月23日(月・祝)　場所：企画展示室　観覧料：500円

2014(平成26)年12月30日に88歳で逝去された作家宮尾登美子さんの追悼展。日本の伝統文化や歴史上の女性たちの生き様やその生涯をテーマに数々の名作を執筆され、多くの人々に感動と勇気を与えてくださった宮尾登美子さんの人と文学について、資料や写真などを通してご紹介します。

写真提供／世界文化社

12月～平成28年1月　親愛なる寺田先生 ～師・寺田寅彦と中谷宇吉郎展～

12月5日(土)～平成28年1月31日(日)　場所：企画展示室　観覧料：500円

高知県出身の両親を持ち、自身も高知県で少年期を過ごした物理学者・随筆家の寺田寅彦(1878-1935)と、雪の研究で有名な寅彦の弟子・中谷宇吉郎(1900-1962)。「天災は忘れた頃にやって来る」「雪は天から送られた手紙である」、といった名言と共に、師弟の科学、芸術、生き方をご紹介します。

(※12月27日～1月1日は年末年始のため休館となります。)

写真提供：中谷芙二子

平成28年2月～4月　宮沢賢治 ことばの宇宙展

平成28年2月11日(木・祝)～4月17日(日)　場所：企画展示室　観覧料：500円

宮沢賢治の故郷、岩手県花巻市は理想郷イーハトーブとして、動物や自然が生き生きと描かれた作品の舞台となっています。自然との交感の中で生まれた詩や童話のことばの宇宙は、没後80余年たった今も、多くの人々の心を引きつけてやみません。宮沢賢治のすきとおった物語のことばを美しい写真と共にご紹介します。

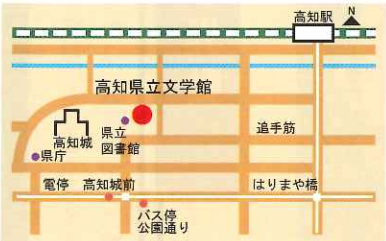
資料提供　林風舎

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日	年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料	一般360円　企画展はそれぞれ異なります。 20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、 高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス〈県庁前行〉「公園通り」下車、北へ徒歩5分
- JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
- 路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分
- バス停「公園通り」下車、北へ徒歩5分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857